

# 1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和7年2月)

野菜振興部 調査情報部

## 【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は9万1293トン、前年同月比84.9%、価格は1キログラム当たり341円、同128.6%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は2万9705トン、前年同月比86.6%、価格は1キログラム当たり310円、同134.2%となった。
- 4月は、キャベツを中心に平年を上回る高値の展開が予想される。果菜類については平年に近い水準まで回復し、たまねぎやばれいしょ類は一時的に高値となることが予想される。

## (1) 気象概況

上旬は、期間の前半に本州南岸と日本海付近を低気圧が通過し、その後強い冬型の気圧配置となったため、旬平均気温は西日本でかなり低く、東日本と沖縄・奄美は低く、北日本では高かった。北海道の太平洋側で記録的な大雪となり、帯広で4日に1953年の統計開始以降で最も多い104cmの日降雪量を観測した。7～8日にかけては、強い冬型の気圧配置の影響により、東日本日本海側を中心に記録的な大雪となった所もあったため、旬降水量は北日本と東日本日本海側でかなり多く、西日本では多かった。旬間日照時間は、西日本日本海側でかなり少なかった。

中旬は、期間の中頃までは、東・西日本を中心に高気圧に覆われやすく、旬平均気温は北日本では高かったが、期間の終わりに強い寒気が流れ込んだ西日本では低かった。旬降水量は、北・東日本太平洋側と西日本で少なく、冬型の気圧配置となる時期や低気圧の影響を受けた北日本日本海側では多かった。

旬間日照時間は、北日本太平洋側と西日本日本海側でかなり多く、東日本と西日本太平洋側で多かった。

下旬は、下旬の前半までは、日本付近で強い冬型の気圧配置が続いたが、後半は冬型の気圧配置が緩み、北日本には低気圧に向かって暖かい空気が流れ込んだ日もあり、旬平均気温は、北日本では高かった一方、東・西日本と沖縄・奄美で低かった。旬降水量は、22日に石川県輪島で6時間降雪量の日最大値が27cmと1997年以降で2月として最も多く「顕著な大雪に関する気象情報」が発表されるなど、北・東・西日本日本海側を中心に大雪となった所があった。24日は西日本太平洋側の平野部でも積雪を観測し、東・西日本日本海側でかなり多くなった。一方で、旬降水量は北・東・西日本太平洋側と西日本日本海側でかなり少なく、東日本太平洋側では平年比1%と1946年の統計開始以降で2月下旬として1位の少雨となった。旬間日照時間は、北・東・西日本太平洋側でかなり多かった。旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り(図1)。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本									
東日本									
西日本									

資料：気象庁「2月の天候」

1 平年を上回る水準 2 平年並み 3 平年を下回る水準

## (2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は9万1293トン、前年同月比84.9%、

価格は1キログラム当たり341円、同128.6%となった(表1)。

品目別の詳細については表2の通り。

表1 東京都中央卸売市場の動向(2月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	91,293	84.9	82.4	341	128.6	138.0	326	344	358
だいこん	8,458	100.0	90.7	123	134.8	138.5	111	119	144
にんじん	4,561	82.9	78.4	216	158.0	172.7	196	211	251
はくさい	8,552	80.2	72.2	176	262.8	339.4	152	185	205
キャベツ類	11,165	78.7	72.6	196	240.9	249.6	181	202	209
ほうれんそう	1,394	84.0	87.5	563	131.7	128.1	537	579	583
ねぎ	3,463	84.7	83.8	502	147.6	162.0	436	508	589
レタス類	5,463	81.3	83.3	303	150.6	142.4	307	313	288
きゅうり	3,823	94.5	87.7	480	96.4	108.8	526	482	428
なす	1,594	111.0	98.9	468	94.7	96.7	489	452	460
トマト	4,156	84.9	85.8	434	115.2	115.5	422	437	444
ピーマン	1,421	89.5	97.1	849	110.7	107.8	850	862	837
さといも	340	85.2	71.6	374	94.6	113.4	363	378	386
ばれいしょ	5,907	78.1	83.3	223	162.0	133.3	224	222	222
たまねぎ	8,219	94.5	86.2	167	89.5	120.0	165	170	164

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、だいこんの価格が、入荷が不安定であった下旬に価格を上げ、前年を3割以上、平年を4割近く上回った(図2)。

葉茎菜類は、はくさいの価格が、気温の低下と他品目が少なかったことから堅調な動きとなり、高値で推移した前年の2.6倍以上となり平年の3.4倍近くとなった(図3)。

果菜類は、ピーマンの価格が堅調で推移し、前年を1割強上回り、平年をかなりの程度上回った(図4)。

土物類は、ばれいしょの価格が月間を通してほぼ変動なく堅調に推移し、安めで推移した前年を6割以上上回り、平年を3割以上上回った(図5)。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 だいこんの入荷量と卸売価格の推移

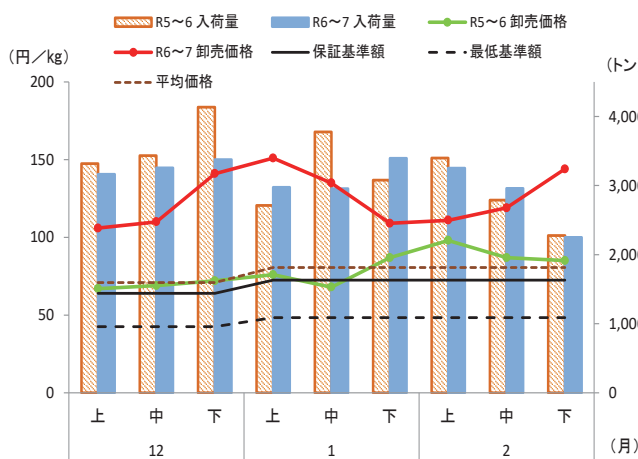


図3 はくさいの入荷量と卸売価格の推移

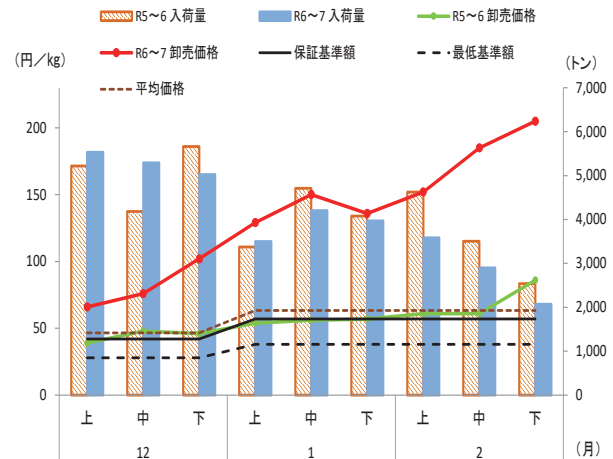


図4 ピーマンの入荷量と卸売価格の推移

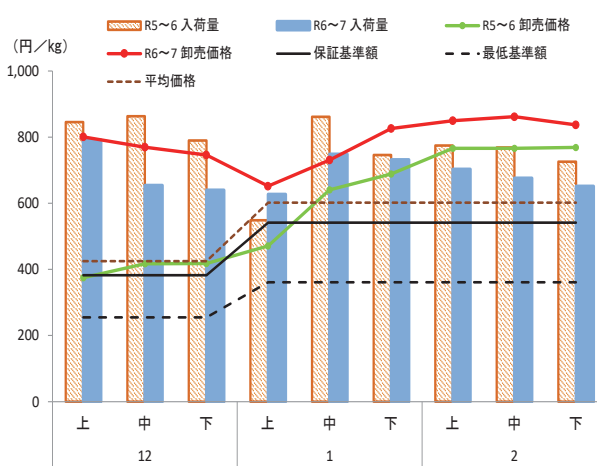
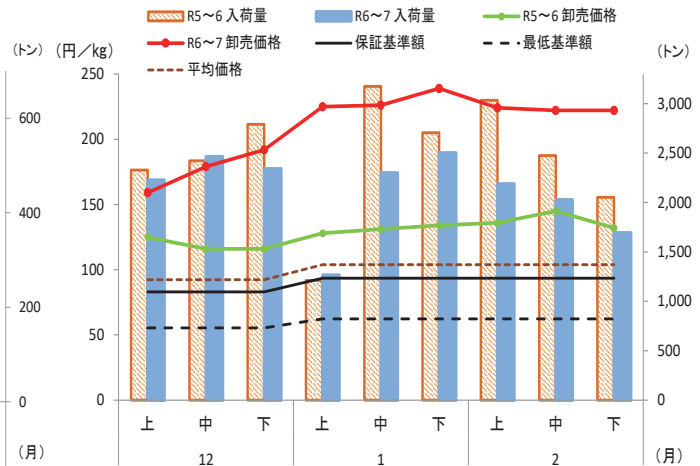


図5 ばれいしょの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、事業における過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	2月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	<p>神奈川産、千葉産中心の入荷であった。神奈川産の作付面積は前年をやや下回り、12月～翌1月の気温の低下と降雨がほとんどなかった影響により乾燥状態が続いた。目立った病虫害は見られないが、一部乾燥による根部障害が散見される。千葉産の作付面積は前年並みで、1月の降水量にばらつきがあり、降雨の少なかった地域は乾燥の影響により生育遅れが散見されたが、全体としてはおおむね良好であった。総入荷量は少なかった前年並みで、平年を1割近く下回った。価格は入荷が不安定であった下旬に上がり、前年を3割以上、平年を4割近く上回った。</p>
	にんじん	<p>千葉産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、高温・乾燥の影響により初期成育が遅延し肥大がよくなかったが、収穫時の天候に恵まれたため、進捗は早かった。後続の徳島産は病虫害やまき直しがあつたものの、10月の適度な降雨によりおおむね順調であった。輸入の中国産は前年を8割近く上回った。総入荷量はやや少なかった前年を2割近く下回り平年を2割以上下回った。堅調な価格が続き、下旬に向けて上昇し、高値で推移した前年を6割近く上回り、平年を7割以上上回った。</p>
葉茎菜類	はくさい	<p>茨城産中心の入荷であった。作付面積は前年並みとなり生育はおおむね順調で、高値続きから収穫が前進しており、切り上がりは早いと予想される。後続の兵庫産は低温により生育が遅延し、降雨も少なく若干小玉傾向であった。総入荷量は少なかった前年を2割弱下回り、平年を3割近く下回った。価格は気温の低下と他品目が少なかったことから堅調な動きとなり、高値で推移した前年の2.6倍以上となり平年の3.4倍近くとなった。</p>
	キャベツ類	<p>愛知産を中心に千葉産などの入荷があつた。愛知産の作付面積は前年並みで、生育初期の高温・乾燥から12月以降の低温・乾燥により生育が良くなかった。虫害も多い。千葉産の作付面積は前年並みで1月の降雨により小玉傾向はやや解消するも、前年並みまでは回復しなかった。気温がやや高めであった影響により病害が散見される。総入荷量は少なかった前年を2割以上下回り、平年を3割近く下回った。絶対量不足により加工需要を中心に、前年入荷のなかった輸入品が目立った。価格は、一時の平年の約3倍となる大幅な高値からはやや落ち着いたものの高値が続き、前年の2.4倍以上、平年の2.5倍近くとなった。</p>
	ほうれんそう	<p>茨城産、群馬産中心の入荷であった。茨城産の作付面積は前年並みで、急激な気温低下と乾燥の影響により特に露地の生育が遅延した。群馬産の作付面積は前年並みで、気温低下と乾燥の影響により露地作を中心に生育不良であった。虫害も多く、被覆していないものは品質低下が顕著であった。総入荷量は暖冬傾向によりやや多かった前年、平年ともに1割以上下回った。価格は低温・乾燥の影響が大きく、露地作の数量が月間を通して伸びなかったことや、ハウス物が生育遅延したことから堅調に推移し、やや高値で推移した前年を3割以上上回り、平年を3割近く上回った。</p>

	ねぎ	<p>千葉産を中心に埼玉産、茨城産など関東秋冬作中心の入荷であった。千葉産の作付面積は前年並みで、12月以降の厳しい低温・乾燥により生育が停滞した。1月以降の気温の上昇と降雨により若干回復したものの、抽苔が懸念される。また葉の確保が難しく、正品率の低下を招いた。茨城産の作付面積は前年並みで、生育は夏場の高温・乾燥の影響による遅延からは回復傾向であったが、その後の低温・乾燥により停滞した。埼玉産の作付面積は前年並みで、生育は回復傾向であったものの遅延し、病虫害も散見された。全体的に春ねぎも遅延傾向にある。総入荷量はほぼ前年並みであった前年を1割以上下回った。</p> <p>正品率の低下に加え、低温・強風などにより入荷が不安定だったことから、価格は高値で推移した前年を5割近く上回り、平年を6割以上上回った。</p>
	レタス類	<p>静岡産、茨城産を中心に香川産、長崎産などの入荷であった。静岡産の作付面積は前年並みで1月の気温の上昇と若干の降雨によりやや前進傾向にあったものの、2月の気温の低下により、停滞および玉肥大に圃場間でばらつきが見られている。茨城産の作付面積は前年並みで、おおむね順調に進んでいたものの、2月の気温の低下と乾燥により生育が停滞した。香川産の作付面積は前年並みで、2月上旬から降雪や低温により生育が遅延し、また凍害や生育不良も散見された。長崎産の作付面積は前年並みで、一部地域で低温・乾燥による生育遅延が散見された。総入荷量は前年、平年ともに2割近く下回った。</p> <p>価格は、加工用を中心に引き合いが強く、下旬に向けて落ち着いたものの、前年を5割強上回り、平年を4割以上上回った。</p>
果菜類	きゅうり	<p>宮崎産を中心に千葉産、群馬産などの入荷であった。宮崎産の作付面積は前年をやや下回り、生育はおおむね順調も一部低温の影響により病虫害や樹勢の低下が散見された。千葉産の作付面積は前年並みで、おおむね順調だが越冬作では病害の発生が前年より多い。群馬産の作付面積は前年並みで、おおむね順調だが一部病害が散見される。また低温・乾燥による生理障害も見られる。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は、関東促成作が増量してきた中旬以降に徐々に落ち着き、高値で推移した前年をやや下回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	なす	<p>高知産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、樹勢は回復傾向にあり着果数は増加しているものの、夜温を下げて管理している圃場は果実肥大が緩慢であった。総入荷量は少なかった前年を1割以上上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は数量が安定していたものの、需要期を外れ動きは今ひとつであったことから、前年、平年ともやや下回った。</p>
	トマト	<p>熊本産を中心に栃木産、愛知産などの入荷であった。熊本産の作付面積は前年を下回り、ミニトマトへの移行が進んでいる。低温で推移したが、生育はおおむね順調である。日照不足の影響により着色不良が散見され、若干小玉傾向であり、病害が散見された。栃木産の作付面積は前年並みで、低温により生育は緩慢でやや樹勢の低下が見られた。病虫害は少ない。愛知産の作付面積は前年並みで、冬春産はおおむね順調だが低温により若干着色不良であり、病虫害の発生が散見された。総入荷量は前年並みであった前年を1割以上下回った。</p> <p>価格は月間を通して大きな動きはなく、前年並みであった前年を1割以上上回った。</p>
	ピーマン	<p>宮崎産を中心に茨城産、高知産などの入荷があった。宮崎産の作付面積は前年をやや下回り、生育はおおむね順調も一部病虫害が散見され、着果負担による樹勢の低下が見られた。茨城産の作付面積は前年並みで、樹勢はやや弱かったものの、1月以降の天候に恵まれ回復しおおむね順調であった。高知産の作付面積は前年並みで、初期生育時の天候不順による生理障害からは回復した。病害は少ないが、一部虫害が散見される。総入荷量は多かった前年を1割強下回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は堅調で推移し、前年を1割強上回り平年をかなりの程度上回った。</p>
土物類	さといも	<p>埼玉産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、生育は良好で収穫は終了しているが残量は少ない。輸入の中国産は前年をわずかに下回った。総入荷量は少なかった前年を1割以上下回り、平年を3割近く下回った。</p> <p>価格は残量が少なく堅調に推移し、高値で推移した前年をやや下回り、平年を1割以上上回った。</p>
	ばれいしょ	<p>北海道産を中心に鹿児島産の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫を終えた。干ばつ傾向から気温の上昇と適度な降雨により回復したものの、残量は多くない。鹿児島産の作付面積は前年並みだが、高温と11月の降雨被害や、低温・乾燥による生育遅延により、作柄が悪く小玉傾向であった。ヒヨドリの食害などもあった。総入荷量はやや多かった前年を2割以上下回り、平年を2割近く下回った。</p> <p>価格は月間を通してほぼ変動なく堅調に推移し、安めで推移した前年を6割以上上回り、平年を3割以上上回った。</p>
	たまねぎ	<p>北海道産を中心に静岡産などの入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで収穫を終えた。作柄はあまり良くなく、中晩生以降の品種は小玉傾向であった。静岡産の作付面積は前年並みで、播種時期の高温や冠水被害により苗の生育不良が散見された。輸入の中国産は前年を3割以上下回った。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は数量が少なかったものの大幅高値であった前年を1割強下回り、平年を2割上回った。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

### (3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は2万9705トン、前年同月比86.6%

価格は1キログラム当たり310円、同134.2%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(2月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	29,705	86.6	84.0	310	134.2	142.8	298	312	325
だいこん	2,106	77.5	73.8	127	160.2	171.2	114	124	153
にんじん	1,936	87.2	85.4	210	177.6	190.7	193	204	235
はくさい	3,824	93.2	87.1	181	261.8	290.3	170	179	200
キャベツ類	3,557	80.6	76.2	194	255.0	258.6	189	197	196
ほうれんそう	351	67.5	63.7	661	158.6	152.2	640	676	670
ねぎ	882	100.6	92.8	662	151.2	167.7	560	691	763
レタス類	702	66.7	67.4	320	171.9	157.7	348	316	297
きゅうり	883	88.6	85.2	447	94.2	106.0	490	449	399
なす	548	121.6	126.6	472	100.9	105.4	510	461	443
トマト	1,206	87.1	87.8	405	112.7	114.6	398	409	409
ピーマン	391	112.3	133.9	842	106.2	108.4	823	864	843
さといも	62	67.8	62.3	473	119.1	156.0	476	488	450
ばれいしょ	2,624	85.6	91.3	226	175.4	135.7	221	227	233
たまねぎ	4,532	97.8	90.9	151	90.3	119.2	153	154	144

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

類別	品目	2月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	鹿児島産が中心となり、徳島産、和歌山産、長崎産などの入荷があった。急な気温低下で生育が進まず、細物傾向で産地出荷量が少なく、鹿児島産の月間入荷量は前年を大幅に下回った。長崎産は出荷が前進し残量が少なく中旬で切り上がった。全体では旬を追うごとに入荷減量となり、月間で前年を2割近く下回り、平年を3割以上下回った。 価格は不足感に加え、野菜全体の高値続きの影響もあり、入荷減量に伴い旬を追うごとに高騰を続けた。月間では前年の1.6倍の価格となり、平年の1.7倍以上であった。
	にんじん 	鹿児島産を中心とし、長崎産の残量の入荷があった。急な気温低下による生育不良で細物傾向となり、前月までの気温高で前進出荷したため残量が少なく、産地出荷量は少ない状況が続いた。特に太物が少ない分を輸入の中国産で補填し、業務用関係を中心に販売したことから、中国産の月間入荷量は前年の1000倍近くとなった。しかし全体では旬を追うごとに入荷減量となり、月間でも前年、平年ともに1割以上下回った。 価格は不足感と野菜全体の高値の影響から高値で推移し、旬を追うごとに高騰を続け、月間では前年の1.8倍、平年の1.9倍であった。
葉茎菜類	はくさい 	茨城産が中心となり、愛知産の入荷も主体となった。干ばつの影響で産地出荷量は伸びず、茨城産は極端に少なかった前年を大きく上回ったものの、入荷量自体は少なかった。後続の春物産地も入荷開始したものの出遅れて増えず、月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年を1割以上下回った。 価格は絶対量不足と野菜全体の高値の影響で高値で推移し、急な気温低下で引き合いも強まったことから旬を追うごとに上伸した。月間では前年の2.6倍以上、平年の3倍近くとなった。
	キャベツ類 	冬キャベツは愛知産が中心となり、春キャベツは愛知産を中心に、和歌山産や兵庫産の入荷があった。各地とも急な気温低下により玉伸びが悪く、前月までの前進出荷が影響して、もともと少なかった入荷量がさらに減少し、月間全体では前年を2割程度下回り、平年を2割以上下回った。 価格は、長く続く高値の影響が残る中で、絶対量不足からさらに高騰し、月間では前年、平年ともに2.5倍以上となった。
	ほうれんそう 	徳島産と福岡産が主体となる入荷で、近隣産地の奈良産や大阪産の入荷もあった。各地とも気温低下と干ばつの影響により生育が悪く、産地出荷量が少ない状況が続いた。主力の両産地とも月間入荷量は前年を大幅に下回り、全体では前年を3割以上下回り、平年を4割近く下回った。 価格は不足感から高値となり、野菜全体の高値に加えて業務用関係からの引き合いが強くなり、旬を追うごとに高騰を続けた。月間では前年、平年ともに1.5倍以上となった。

	 <p>ねぎ（白ねぎ）</p>	<p>群馬産を中心に鳥取産と静岡産も主体となり、埼玉産など各地の入荷があった。北関東産地が潤沢な出荷を続け、群馬産は月間では前年を大幅に上回ったが、月間全体では前年をやや上回った。 野菜全体の高値が続く中、急な気温低下で需要が高まり、価格は旬を追うごとに上伸した。月間では前年を大きく上回った。</p>
	 <p>ねぎ（青ねぎ）</p>	<p>青ねぎは徳島産が中心となり、高知産や近隣の奈良産、大阪産の入荷もあった。小ねぎは高知産と静岡産が主体となる入荷であった。各産地とも気温低下と干ばつで生育不良となり、産地出荷量が少ない状況が続いた。静岡産の小ねぎは前年が極端に少なかったため、前年を上回ったが、他の全産地とも前年を下回り、月間全体で前年を大幅に下回った。 価格は不足感から高値推移となり、業務用関係からの引き合いも強く旬を追うごとに高騰した。月間では前年の2倍近い価格となった。</p>
	 <p>レタス類</p>	<p>ラップ物のレタスは兵庫産が中心となり、香川産、徳島産などの入荷があった。裸レタスは長崎産が中心となり、九州各産地などの入荷があった。各地とも急な気温低下と干ばつにより生育が悪く、産地出荷量が少ない状況が続いた。月間の入荷量は、兵庫産で前年をかなり下回り、香川産は前年の半分以上、徳島産は5分の1という結果で、全体でも前年を大幅に下回った。サニーレタスは福岡産が中心となる入荷であったが、レタス同様に気温低下と干ばつにより産地出荷量が少なく、全体の入荷量は前年を下回った。リーフレタスは福岡産が中心となり、レタス同様に気温低下と干ばつにより出荷量が伸びず、月間の入荷量は前年を大幅に下回った。レタス類全体の入荷量は前年、平年とも3割以上下回った。 価格は不足感と野菜全体の高値の影響から高騰が続き、玉レタスは月間では前年の1.7倍、サニーレタスとリーフレタスは前年の1.5倍となった。レタス類全体でも月間では前年の1.7倍、平年の1.5倍以上となった。</p>
<p>果菜類</p>	 <p>きゅうり</p>	<p>宮崎産を中心として、高知産や徳島産も主体となる入荷であった。各産地とも急な気温低下で出荷が安定せず、不安定な入荷が続いた。入荷量は旬を追うごとに減量傾向で、月間全体の入荷量も前年、平年ともに1割以上下回った。 価格は、野菜全体の高値の影響により販売が鈍く、特売需要も少なかったことから伸び悩み、旬を追うごとに下落傾向となった。月間では前年をやや下回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	 <p>なす</p>	<p>千両系は高知産が中心となる入荷で、長なすは福岡産と熊本産が主体となる入荷であった。各地とも順調な出荷が続き、旬を追うごとに減量傾向となったが、全旬とも潤沢な入荷で、月間全体では前年、平年ともに2割以上上回った。 価格は寒波の影響が出るとの情報から積極的な販売ができない中で、入荷が潤沢だったことから旬を追うごとに下落傾向となった。月間の価格は前年をわずかに上回り、平年をやや上回った。</p>
	 <p>トマト</p>	<p>愛知産と熊本産が主体となる入荷であった。急な気温低下で着色が進まず各地とも産地出荷量が少ない状況が続き、月間全体の入荷量は前年、平年ともかなり大きく下回った。 価格は、前年の安値と野菜全体の高値傾向の影響もあり高値で推移した。月間では前年、平年ともに1割以上上回った。</p>
	 <p>ピーマン</p>	<p>宮崎産を中心に高知産や鹿児島産も主体となる入荷であった。潤沢な入荷であったが急な気温低下で着果不良が発生し、入荷量は旬を追うごとに減量傾向となった。月間全体の入荷量は前年を1割以上上回り、平年を3割以上上回った。 価格は野菜全体の高値を受けて高値で推移し、月間では前年、平年ともかなりの程度上回った。</p>
<p>土物類</p>	 <p>さといも</p>	<p>国産は愛媛産が中心となる入荷であった。産地残量が少なく入荷量は少ない状況が続いた。品薄であったことから輸入の中国産が多く、前年の2倍近い入荷となった。月間全体では前年を3割近く下回り、平年を4割近く下回った。 品薄感と野菜全体の高値の影響もあり、全旬を通じて高値で推移した。月間全体では前年の約1.2倍、平年の1.5倍以上となった。</p>
	 <p>ばれいしょ</p>	<p>丸芋は鹿児島産を中心とし、北海道産の残量入荷があった。北海道産は切り上がり早く産地残量が少なく、月間の入荷量は前年の半分以上下回った。新物の長崎産は上旬で切り上がり、鹿児島産は出遅れから全旬とも入荷量が伸びず、月間で前年の半分以上下回った。丸芋は月間全体で、前年の半分以上下回った。メークインは北海道産が中心となる入荷であったが、寒波の影響で産地出荷が不安定となり、入荷量が少ない状況が続いた。ばれいしょ全体では前年を1割以上下回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は不足感から高値続きとなり、野菜全体の高値の影響もあり丸芋は前年の1.5倍、メークインは前年の2.5倍以上の価格となった。ばれいしょ全体では前年の1.7倍、平年の1.3倍以上となった。</p>
	 <p>たまねぎ</p>	<p>北海道産を中心とし、新物産地の長崎産と兵庫産の残量入荷があった。北海道産は残量が多い中でも小玉傾向で、極端に少なかった前年を大きく上回ったものの、入荷量自体は伸び悩んだ。長崎産は大玉傾向であったが出遅れから入荷量が少なく、月間では前年を大幅に下回った。輸入の中国産の入荷もあったが国産との価格差がそれほどなく入荷量は前年を下回った。月間全体では前年をわずかに下回り、平年を1割程度下回った。 価格は、品不足で高騰が続いた前年を1割程度下回り、野菜全体の高値の影響や新物の出遅れ感から、平年の1.2倍程度となった。</p>

（執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹）

#### (4) 首都圏の需要を中心とした4月の見通し

3月3日から降雨があり、関東をはじめ全国的に干ばつが解消し、春物は遅れを取り戻して来ると見込まれる。全国的に見ると、春物が遅れて始まると不作傾向となりやすく、引き続き市場では、キャベツを中心に平年を上回る高値の展開が予想される。果菜類については平年に近い水準まで回復し、一時の高値は解消されると予想される。たまねぎやばれいしょ類は北海道産が早めに切り上がり、九州産がやや遅れて谷間になり、一時的に高値となることが予想される。メロンやすいか類は、好天が続いた時期に結実したため、4月末の連休前頃には充実した物が市場に出荷され、年明けから2月まで遅れたいちご類も、全国的に潤沢に出荷されると見込まれる。

#### 根菜類

だいこんは、千葉産（海匠<sup>かいそう</sup>）は干ばつで大きさが揃わず遅れているため、若干出荷が少ない状況が続いている。3月に入り降雨が続くと4月上中旬に最大のピークとなり、5月中旬に入り終盤を迎えると予想される。千葉産（鎌ヶ谷）は、乾燥が続いた影響で、出荷開始が3月末か4月初め頃にずれ込み、出荷のピークは5月上中旬と予想される。作付けは前年の95%と減っている。神奈川県産は、乾燥の影響により、遅れて小ぶりに仕上がっている。通常は1~2月がピークで、3月は減少する時期であるが、3月初旬時点では3月出荷分が遅れて谷間となっている。3月3日~5日の降雨で肥大は回復し、前年並みの出荷が予想される。

にんじんは、徳島産は3月に入り走り物が始まってきたが、例年と同じタイミングであり、10日頃から本格化し、さらに17日から増えてピークになると予想される。このピークは5月10日まで続き、その後6月上旬までの出荷となると見込まれる。干ばつ気味ではあったが生育に問題はなく、前半はM中心のLで出荷されると見込まれる。静岡県産は、ほぼ前年と同じタイミングの4月3日から出荷を開始し、14日頃からピークとなり、4月末から徐々に減ってくると予想される。品種は従来と同様「ベータリッチ」であるが、新品種も入っており、中心

サイズはLである。

#### 葉茎菜類

キャベツは、愛知産は、3月初旬時点で前年の70%程度の出荷となっている。3月上旬の降雨で増えても、同80%程度で大きな山は来ないと予想している。4月までは現状維持で推移し、4月下旬から6月上旬まで夏作となる。夏作の定植は干ばつ下であったものの順調に行われた。千葉産は、年明け頃の降雨の影響により、菌核病<sup>きんかく</sup>が発生し出荷は減っている。3月後半から増加傾向で推移すると見込まれるが、4月上旬にいったん少なくなり、4月は多少増える程度で推移し、本格的なピークは5月中下旬と予想される。神奈川県産は、3月初旬時点では早春キャベツの中盤で、本春キャベツ（三浦地方の春キャベツ）は定植時期の乾燥で遅れている。3月上旬の降雨により3月の下旬に一回ピークが来て、4月に入り本春キャベツが増えて下旬に2回目のピークとなり、4月の出荷は例年並みに盛り返してくると予想される。

はくさいは、茨城産は、秋冬物は3月も残量はあるが少なめで出荷されると見込まれる。春はくさいは3月初旬時点では、生育は順調で例年並みに3月10日頃から始まり、3月下旬から増えて4月がピークとなり、前年並みの出荷が予想される。

ほうれんそうは、埼玉産は、干ばつが続いているが生育は順調である。4月の春作の作付けは若干減っており、さといもやえだまめに品目転換している。露地物となるが灌水<sup>かんすい</sup>は出来ており、前年並みの出荷と予想される。

ねぎは、茨城産は、3月からの新物は順調に定植が行われたが、1~2月の低温とさらに干ばつが長く続いたことから、大幅に生育が遅れている。現状は細く短めで、出荷の箱数も伸び悩んでいる。前年の3月は寒の戻りから伸び悩んで出荷が減ったが、今年も前年並みの可能性がある。ねぎ坊主（とう立ち）も出やすく、不作傾向で推移すると予想される。埼玉産は、4月に入り春ねぎとなるが、やや遅れている。それでも量的には前年を上回る出荷と予想される。6月は夏ねぎになるが、谷間が生じ急激に減少すると見込まれる。千葉産は、生育は遅れ気味で、3月初めまでは例年の80~90%の

出荷となっている。3月20日から春ねぎが開始し、引き続き同程度のペースで出荷されると見込まれる。4月にはピークを迎え、4月末頃から減り始め、その頃から夏ねぎの早物が始まってくると予想される。

レタスは、茨城産は、生育は順調であるが、3月初旬の段階では一雨欲しいところである。それでも3～4月は平年並みの出荷が予想される。大幅に前進して4月の出荷量が少なかった前年を大幅に上回ってピークとなる見込みである。兵庫産は、晴天が続いたため生育は順調で、5月の連休明けまで潤沢な出荷の継続が予想される。作付けの減少もあるため、4月は前年並みかやや減と見込まれる。香川産は、3月4日の時点で降雨があり、出荷のピークは3月で、その後は5月上旬まで安定的に推移するものの、4月の出荷は3月より少ないと見込まれる。切り上がりは、5月末頃と予想される。

## 果菜類



きゅうりは、埼玉産は3月初旬時点で、加温の春きゅうりの出荷が開始したところで、生育は順調である。ピークは5月の連休明け頃で、4～5月は潤沢な出荷が見込まれる。千葉産は、春きゅうりのピークとなっており、生育は順調で3月下旬から4月がピークとなり、引き続き5月も多く6月上旬まで出荷が見込まれる。生産者によっては、加温から無加温に移行している人もおり、前年比はやや減となることが見込まれる。

なすは、高知産は、3月初旬時点までの出荷は例年よりやや少なめとなっている。3月に入り平年並みに追いつき、4月にはピークとなることが予想される。引き続き5月も多い見込みである。福岡産の生育は順調で、3月に入り徐々に増え始めると予想される。2月までは横ばいで推移したものの、樹勢も問題はなく、3月初旬時点は花盛りとなっており、3月の増量期を経て4月下旬にピークを迎えると予想される。

トマトは、熊本産は3月中旬に微増し、その後は現状推移で例年の80～90%ペースとなり、6月20日までの出荷と予想される。大玉もしっかり木についており、5月のどこかの時点で急増しピークとなる場面が予想される。佐賀産は、「光樹とまと」が3月に入り増えてい

るが、まだ平年に届いていない。4月にピークとなり、5月に入り少なかった前年を上回り、5月下旬から徐々に減っていくと予想される。Mサイズ中心の4キログラム箱で出荷される。愛知産は、3月までは前年の90%と少なめの出荷が続いたが、4月には前年並みに回復しピークとなる見込みである。出荷は6月中旬まで、Mサイズ中心と予想される。

ミニトマトは、和歌山産は、「キャロル7」は前年8月の定植で11月から出荷が始まり、現状は中盤である。2月までは干ばつと寒さにより、例年の80～90%ペースで推移してきた。今後3～5月は増量しながら推移するものの、前年は上回らないと予想され、例年同様に6月末の切り上がりが見込まれる。熊本産は、2月まで前年比80%程度で推移してきたが、3月に入り増量期を迎え、最大のピークは4～5月と予想される。それでも前年比で90%台までの回復と見込まれる。最終出荷は7月までと予想される。

ピーマンは、茨城産は、2月までは好天続きで安定的な出荷であった。3月に入り初旬に降雨が続くため、一時的に出荷が減ると予想される。4月に入り無加温物が始まってくることや、加温物も木がしっかりしていることから前年並みかやや多めに出荷されると予想される。高知産は、干ばつや低温の影響もなく、順調に出荷されており、全体のピークは4～5月で、例年並みと予想される。

## 土物類



ばれいしょは、鹿児島産（出水）の春ばれいしょは、4月5日前後から出荷開始となる。寒波の影響もあり生育は遅れているものの雪や霜による寒害は報告されていない。小ぶりで早めに出荷すればメリットはあるが、圃場で大きくなってから出荷すれば大きな減収とはならないと予想される。鹿児島産（大隅）の春ばれいしょは、2月28日から出荷が始まり、生育は順調である。一部圃場では寒害を受けており、生産量が若干減少すると予想される。3月は増量傾向で推移し、4月初め頃にピークを迎え4月後半には減少してくると予想される。品種は「ニシユタカ」である。長崎産は、3月初旬時点で生育が遅れ、降雪による寒害もあった。今後の



降雨で盛り返すものの、不作傾向になると予想される。ピークは5月となる見込みである。

たまねぎは、佐賀産は、3月に入り少量ずつ出荷が始まってきた。極早生物が本格出荷を迎えるのは4月上旬からとなるが、生育が2週間近く遅れており、4月は前年を下回ると予想される。3月初旬時点の草丈から判断して、3月の降雨で肥大し過ぎることはない予想される。香川産は、定植量は前年並みであり、早生物の出荷の開始は4月末頃からで、ピークは6月上旬となり、7月上中旬に切り上がると見込まれ、例年並みの収穫が予想される。

## その他

ブロッコリーは、愛知産は、12月から2月までは出荷量が少なかったが、3月に入り平年並みとなっており、3月3日からの降雨により増量し、4月いっぱいまで前年並みの出荷が予想される。熊本産は、2月末頃から3月初めの気温の上昇によりピークを迎えている。3月いっぱいには一定のペースで推移し、4～5月は潤沢ペースを維持できると予想される。埼玉産は、春ブロッコリーは3月5日の降雪・積雪の影響はそれ程ないものの、例年のピークは4月10日頃であるが、若干後ろにずれるといった生育の遅れが見込まれる。

カリフラワーは、福岡産は、11月の大雨被害や、その後の乾燥で木が出来ていない。ヒヨドリによる食害も発生するなど、例年の半分程度の出荷になっている。それでも3月に入り暖かくなって出荷が増えてきているが、一定程度のペースが続く見込みである。

かぼちゃは、ニュージーランド産は、年内は干ばつで推移し年末に降雨があったが、年明け後は低温となるなど天候の振れ幅は大きいようである。生育は後半に盛り返し、ほぼ平年作となることを見込まれる。3～5月上旬までがニュージーランド産の入荷量としてはピークで、6月はかなり減少すると予想される。入荷量は前年並みで、価格は昨年よりやや高めであり、サイズはMが中心である。

ごぼうは、熊本産の新ごぼうは12月から出荷が開始し、6月いっぱいまでと予想される。8月の播種時からの高温の影響により枯れるなど、例年の70%作と不作である。4月末頃から5月の連休明け頃までがピークとなり、1箱に2Lサイズの200グラム袋10袋入りで出荷されると見込まれる。

たけのこは、熊本産は、九州の中で唯一表年であるが、3月初旬時点の出荷は干ばつの影響で裏年と同程度の出荷量である。それでも3月中旬に回復し、ピークは3月25日から4月20日の見込みである。当面は4キログラム箱で出荷し、終盤には10キログラム箱での出荷も予想される。静岡産は出荷が開始しているが、寒波による低温で遅れており、さらに裏年ということもあり、4月としては前年の50%程度と予想している。ピークは4月上旬で、下旬には切り上がると見込まれる。石川産は、例年同様4月中旬から出荷開始となる見込みである。裏年であり、5月の連休明け頃には切り上がると見込まれる。

そらまめは、鹿児島産が3月上中旬にピークとなり4月中旬まで出荷されると見込まれ、寒波の影響は特にならない。

スナップえんどうは、愛知産は昨年の11月から出荷を開始したが、11月の降雨や12月に入ってから乾燥で花が飛ぶなど年内は遅れて半分程度の出荷に留まった。年明けも低温で出荷は伸びず、引き続き2月も停滞した。3月に入り急回復しており、4月にかけてピークになり、5月中旬で切り上がると見込まれる。出荷量は前年の80%程度になると予想される。

グリーンピースは、鹿児島産が始まっているが、2月上旬の霜害で下の段の花が傷んだ。4月上中旬にピークが来るが、出荷量は前年の90%に届かないと見込まれ、5月10日過ぎには切り上がる見込みである。

いちごは、福岡産は「あまおう」となり、2月までは少なかったが3月に入り増えてきて、平年並みに追いつくと予想される。3月初旬時

点で花数は問題なく、2Lサイズの出荷も増えており、3月いっぱいピークが続き、4月が平年並みの天候であれば前年を上回る出荷が予想される。佐賀産は「いちごさん」となり、2月までは例年の70%程度と少なかったが、3月から4月前半までがピークとなる。4月後半には減少してくるが、3～4月は前年を上回ると予想される。

メロンは、茨城産は、作付けはほぼ前年並みで「オトメメロン」は4月上旬から、「アンデスメロン」は4月中旬から、「クインシーメロン」は4月下旬からと、ほぼ例年並みの展開と予想され、5月の連休明けから増えて、最大のピークは5月中旬となると見込まれる。着果を含め、生育は良好であるが、当初の物はやや小玉傾向と予想される。

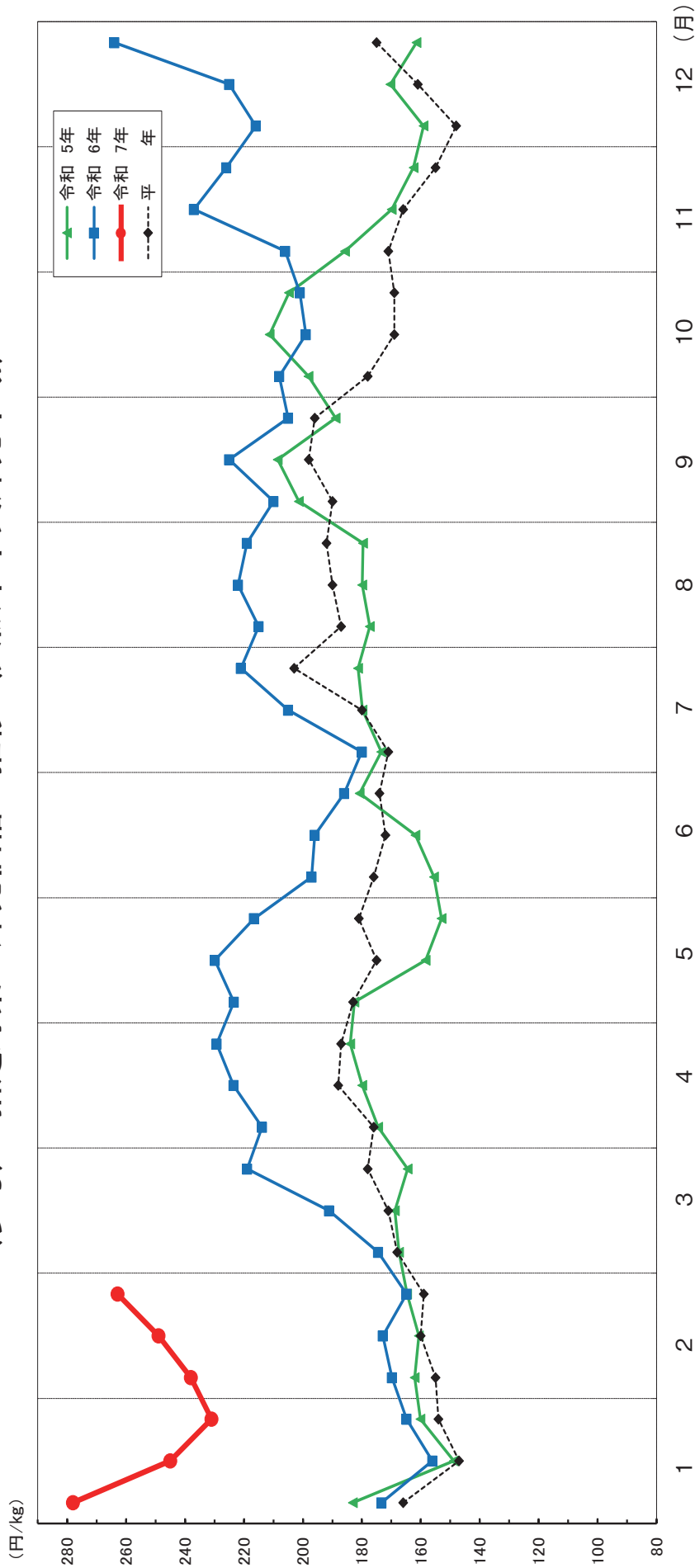
すいかは、熊本産は、本格的に出荷が開始している。作付けは前年の98%と微減である。当面はMサイズ中心となるが、例年と同様のペースで、4月後半から増え始め5月がピークになると予想される。

こだますいかは、茨城産は、定植後の降雨が少なく活着の悪さを心配したが、その後持ち直し、交配は順調に始まった。3月は前年並みだが、4月に入ると前年を上回る出荷が予想される。

(執筆者：千葉県立農業大学校  
講師 加藤 宏一)



# (参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月															
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬														
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	162	181	173	180	181	177	180	180	201	209	189	198	211	205	186	170	162	159	170	161			
令和6年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223	230	217	197	196	186	180	205	221	215	222	219	210	225	205	208	199	201	206	237	226	216	225	264		
令和7年	278	245	231	238	249	263																																
平	166	147	154	155	160	159	168	171	178	176	188	187	183	175	181	176	172	174	171	180	203	187	190	192	190	198	196	178	169	171	166	155	148	161	175			

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（令和2年～6年）の旬別価格の平均値である。

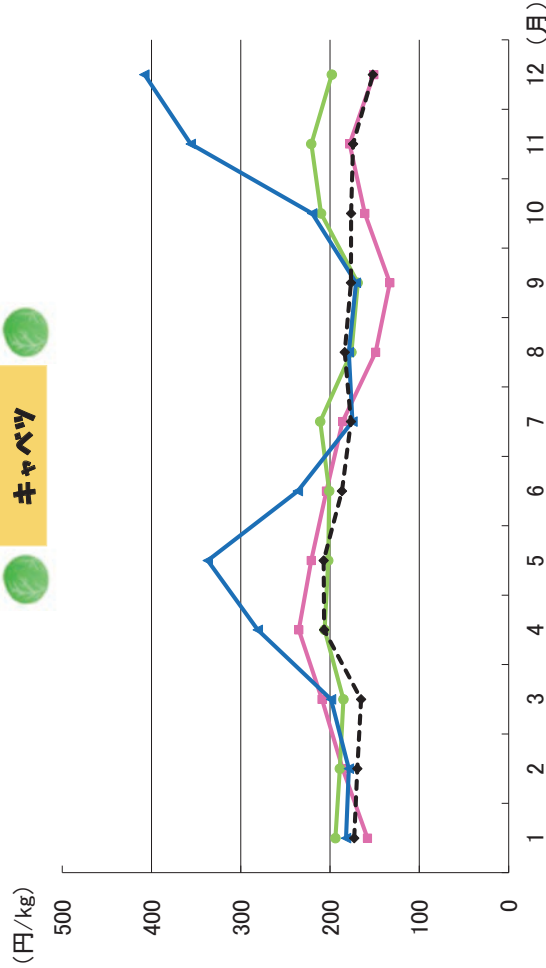
注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。

# (参考) 主要な野菜の小売価格の推移 (東京都区部)

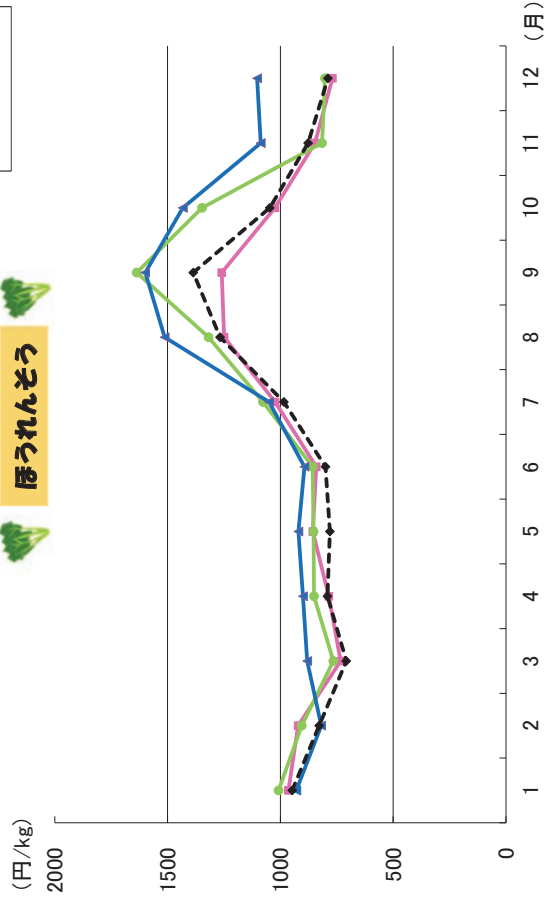
## 1. 葉茎菜類



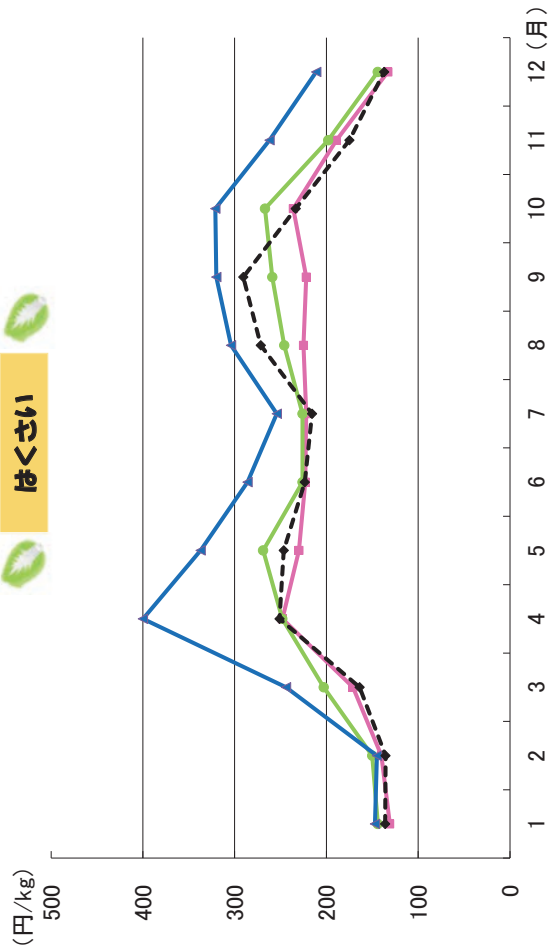
キャベツ



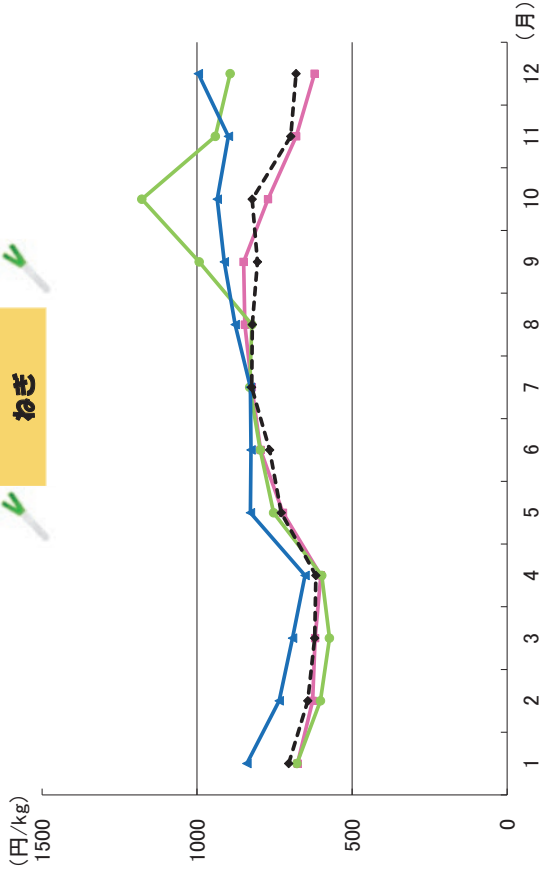
ほうれんそう



はくさい



ねぎ

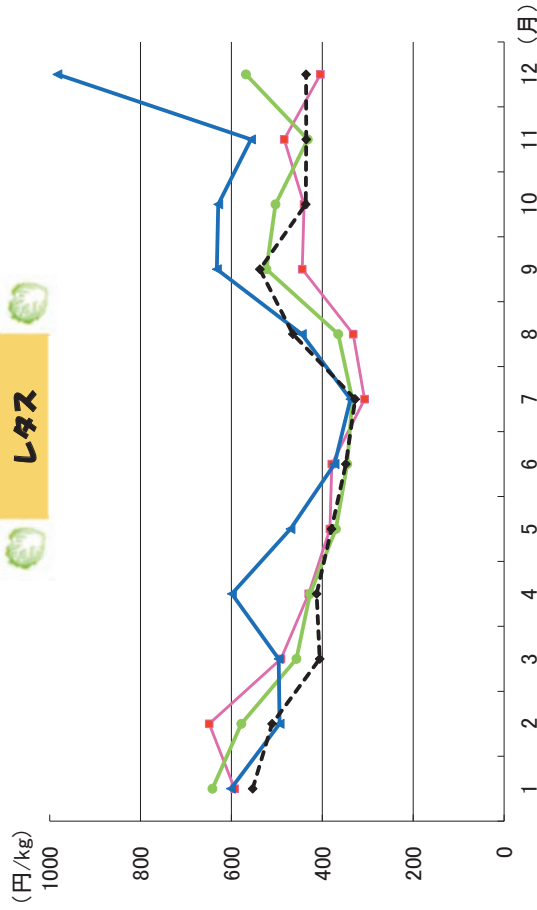


(注) 平年値は令和元年から5年の5か年平均

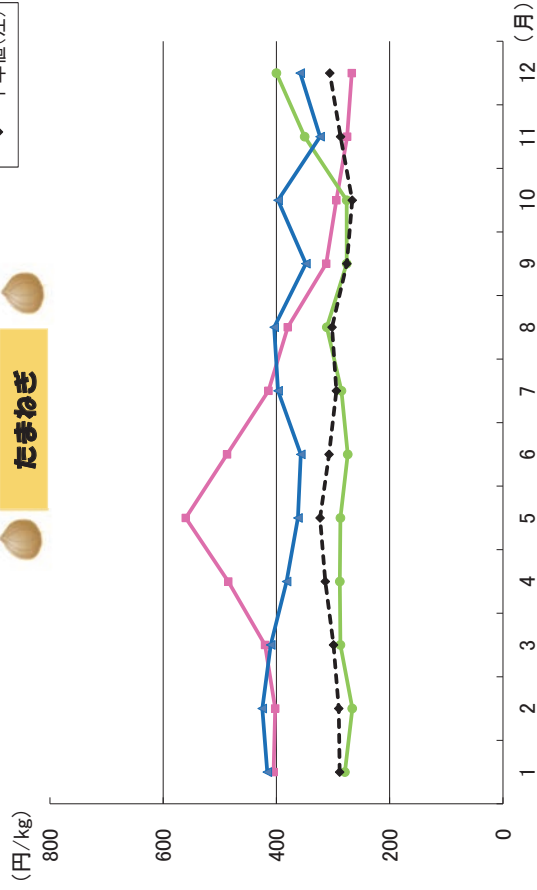
# 1. 葉茎菜類



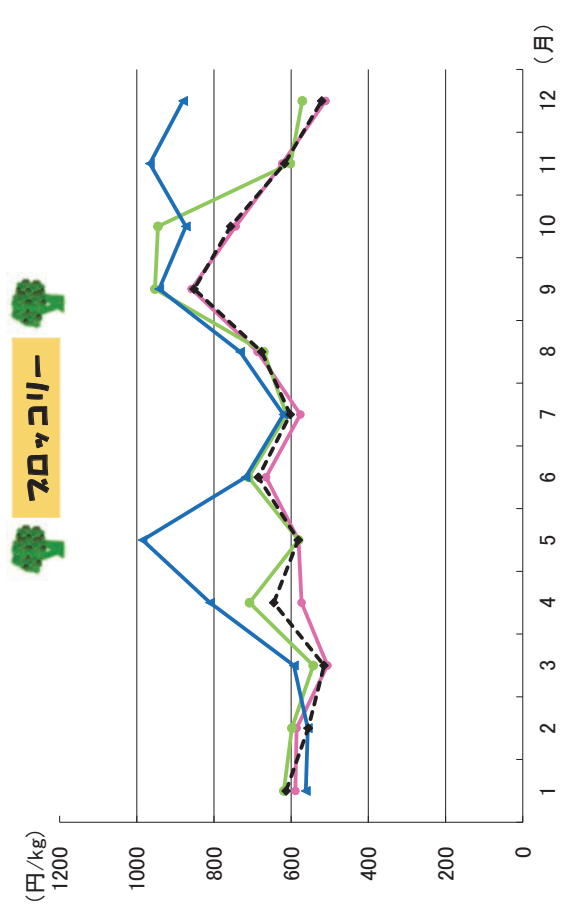
レタス



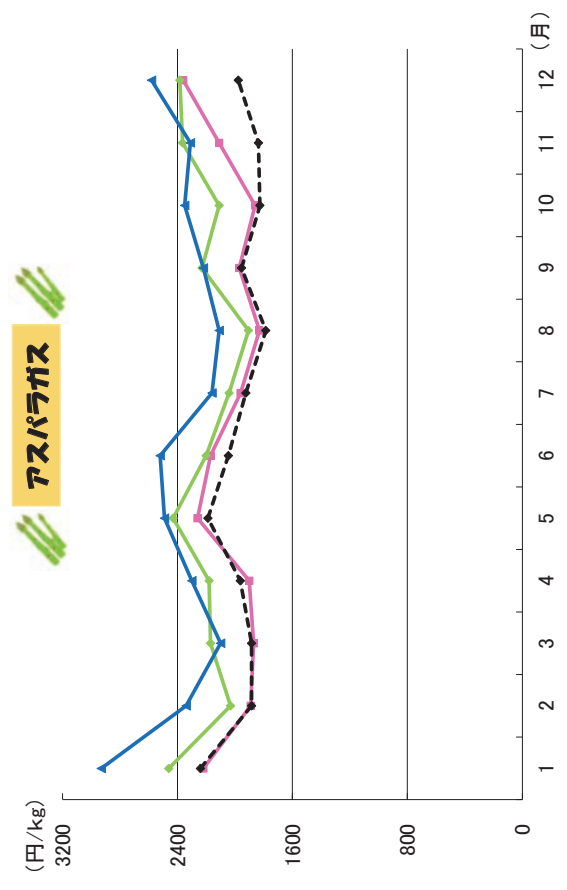
たまねぎ



ロマッコリー



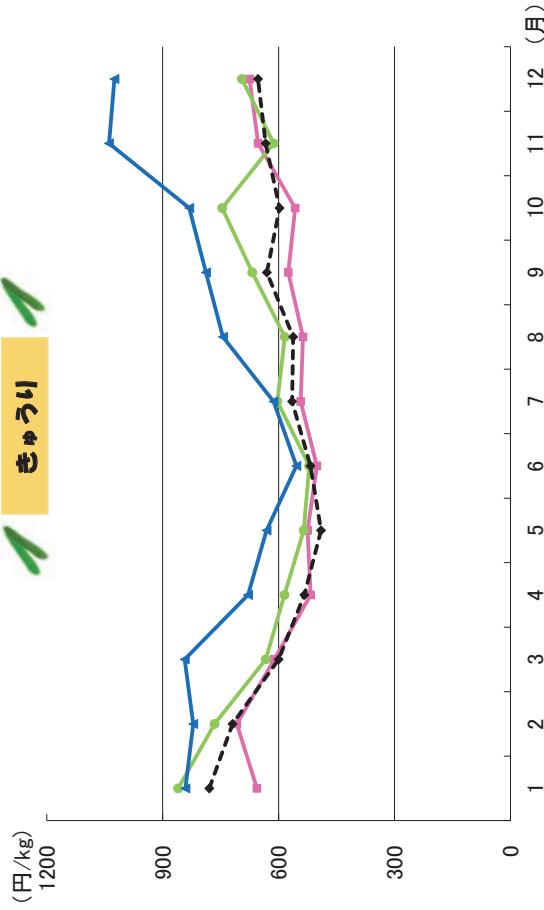
アスパラガス



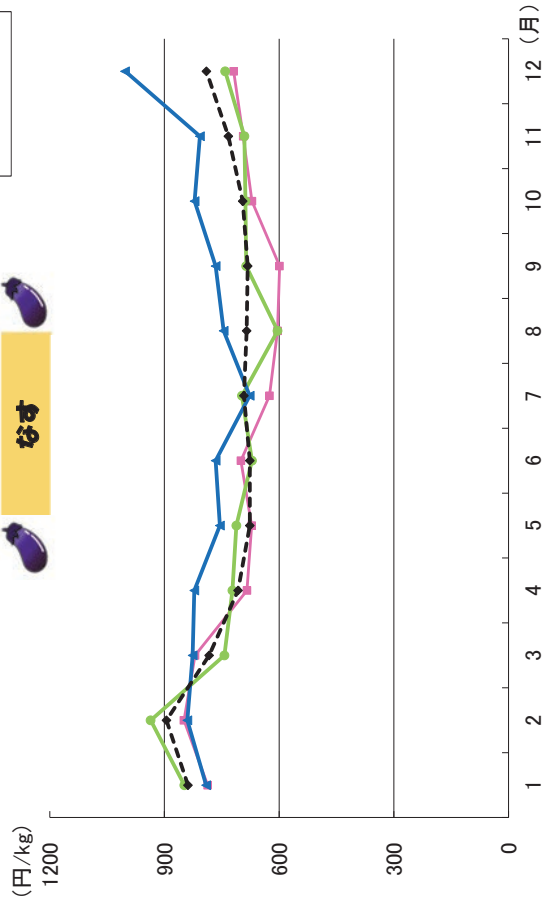
## 2. 果菜類、根菜類



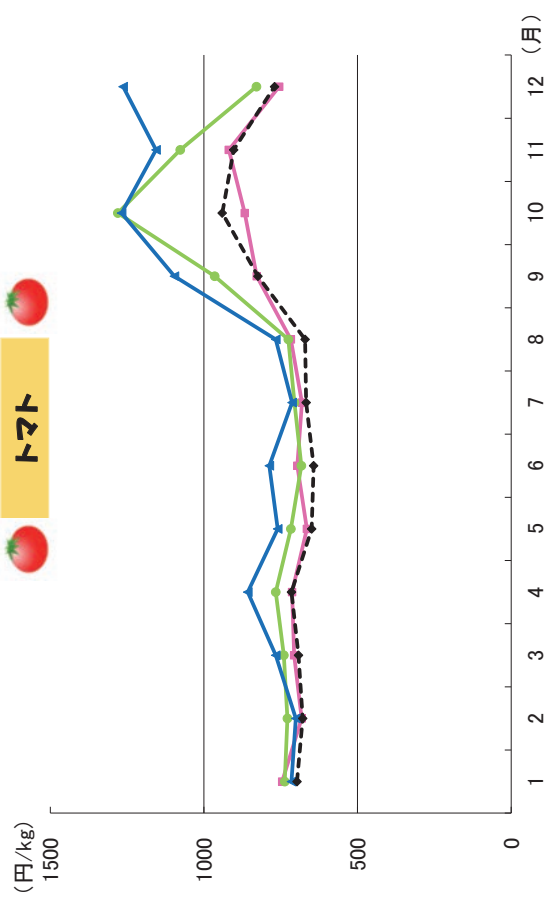
きゅうり



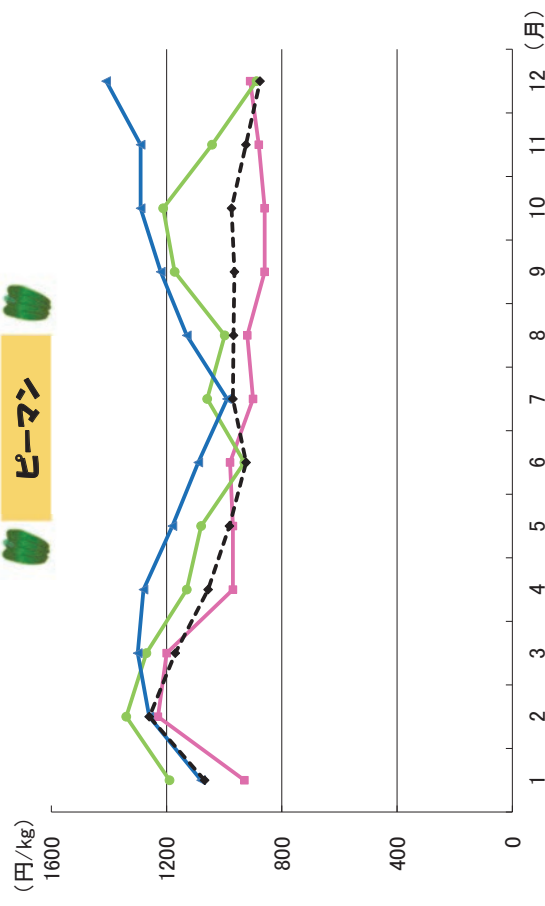
なす



トマト



ピーマン

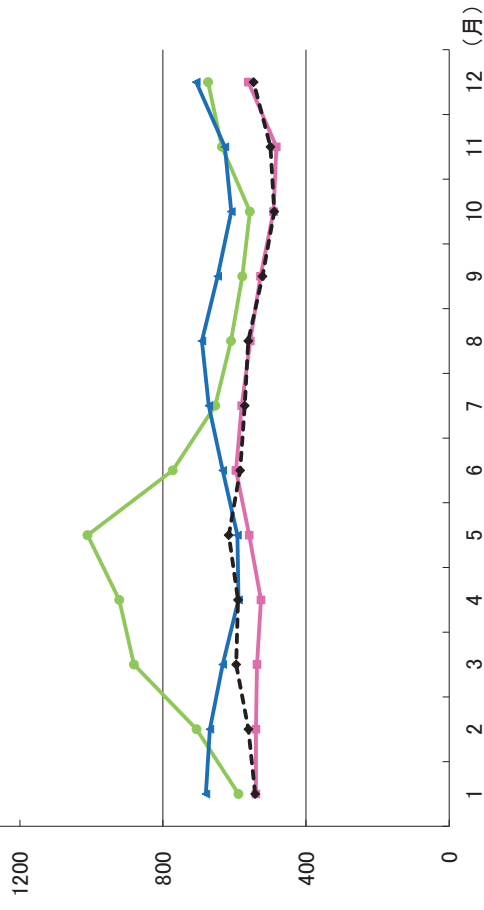


## 2. 果菜類、根菜類



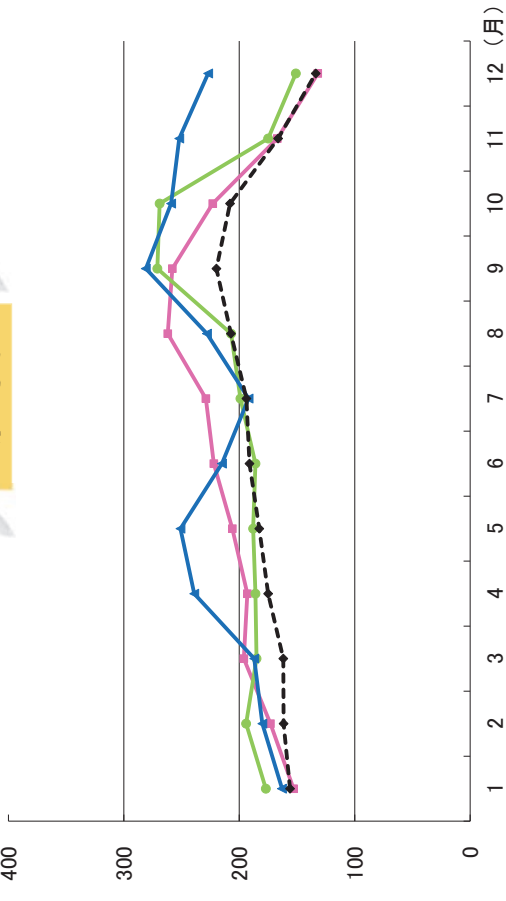
かぼち

(円/kg)



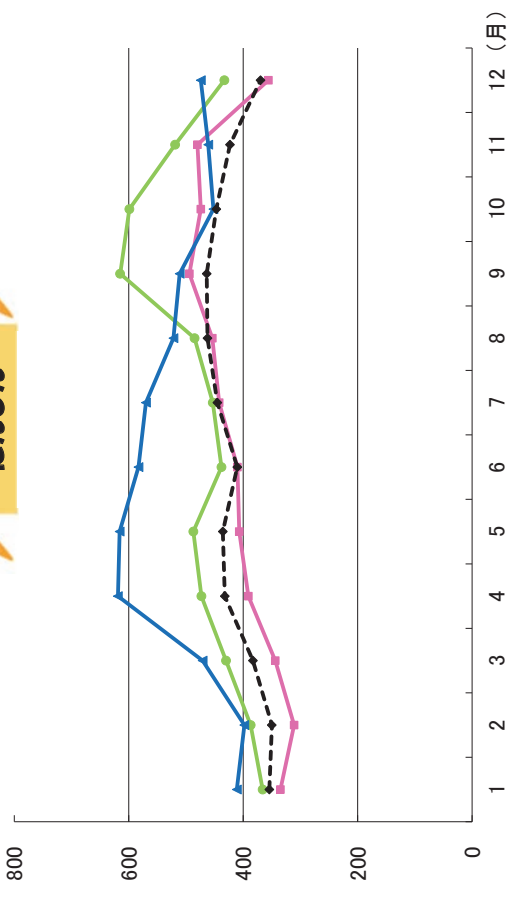
だいこん

(円/kg)



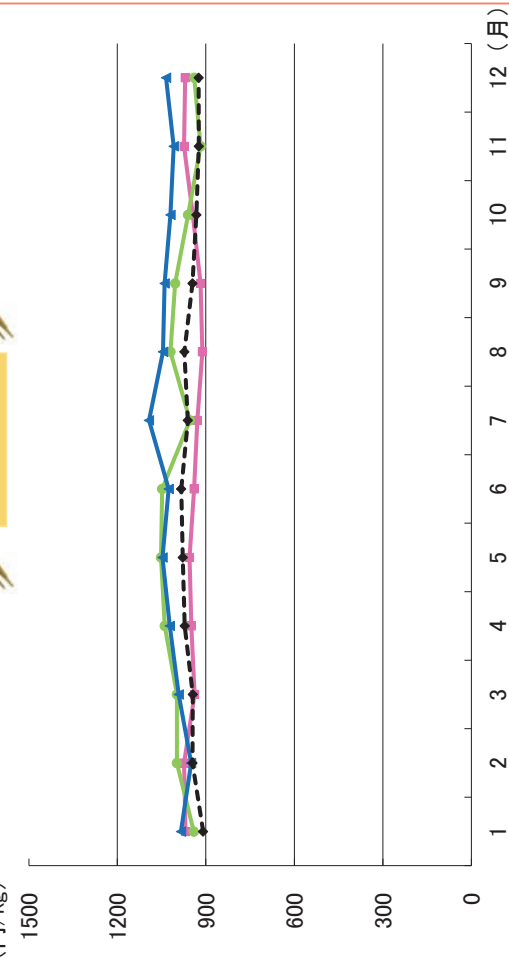
にんじん

(円/kg)



ごぼう

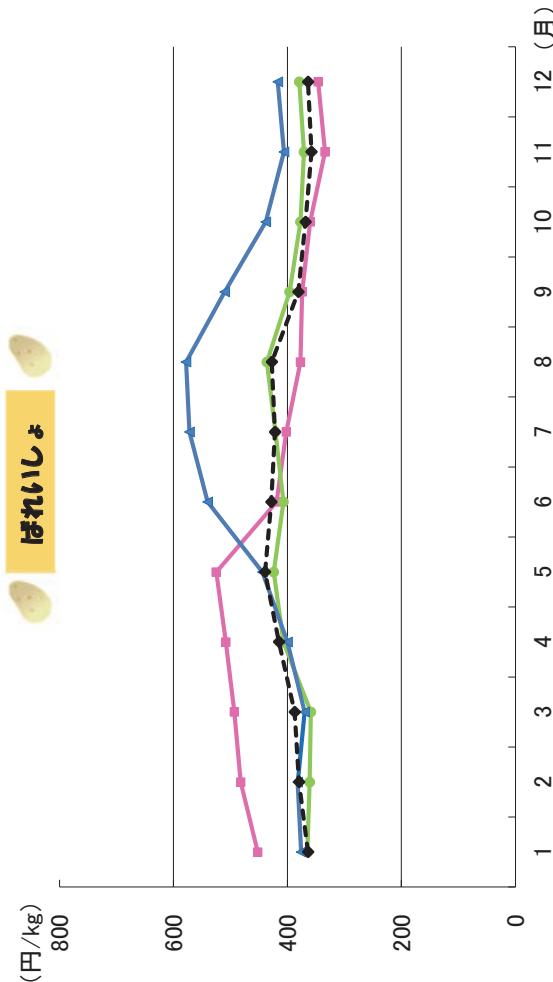
(円/kg)



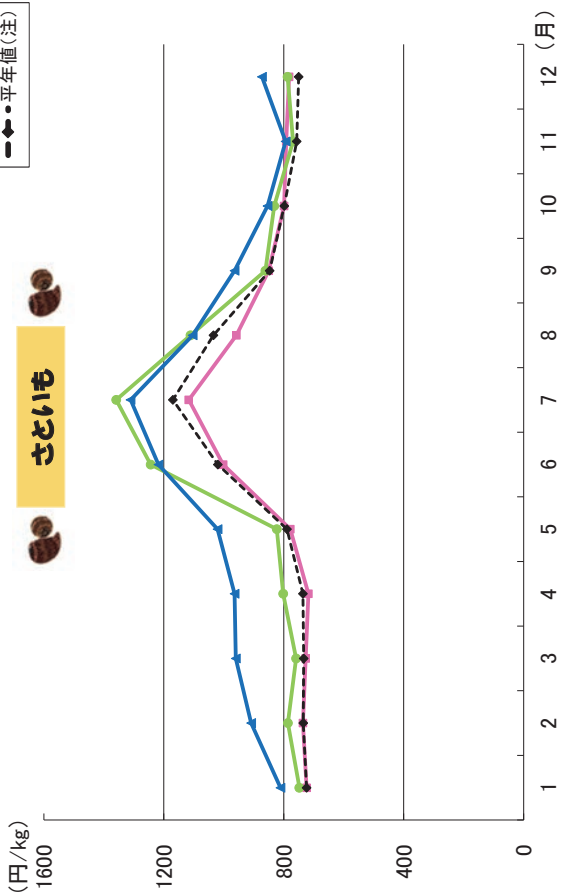


### 3. その他

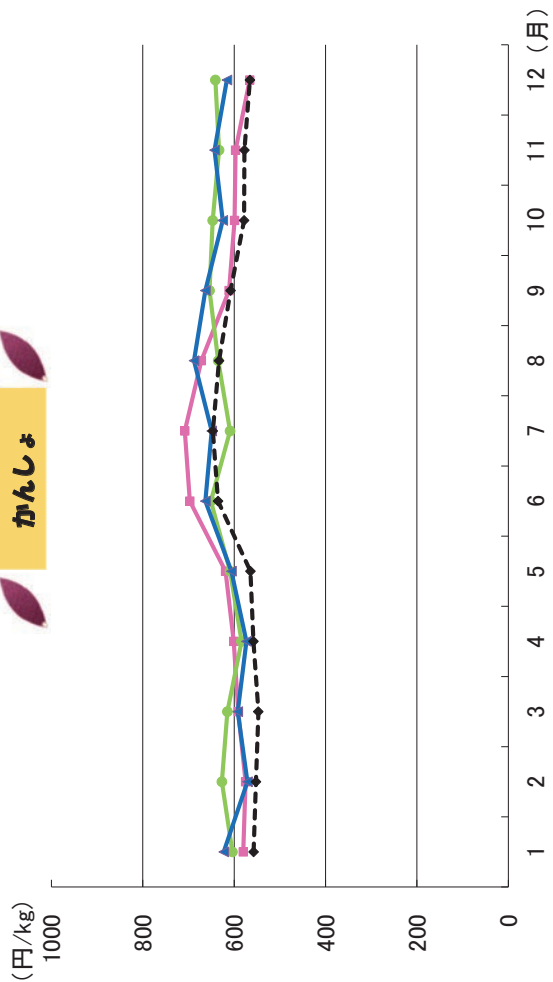
ばれいしょ



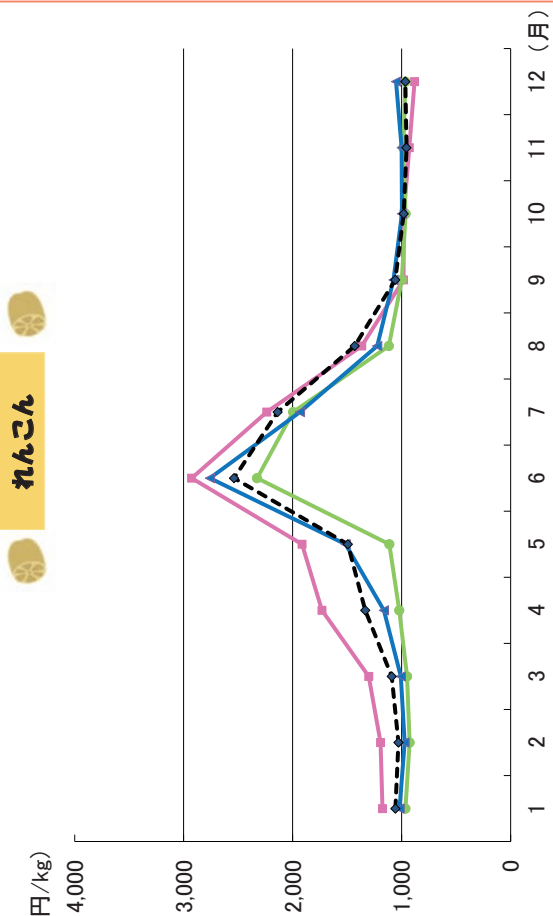
さといも



かんしょ



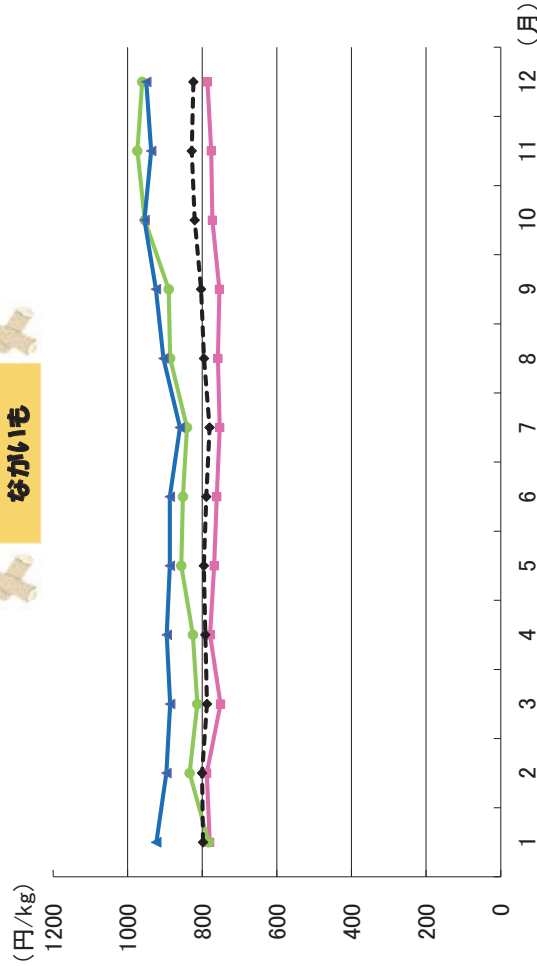
れんこん



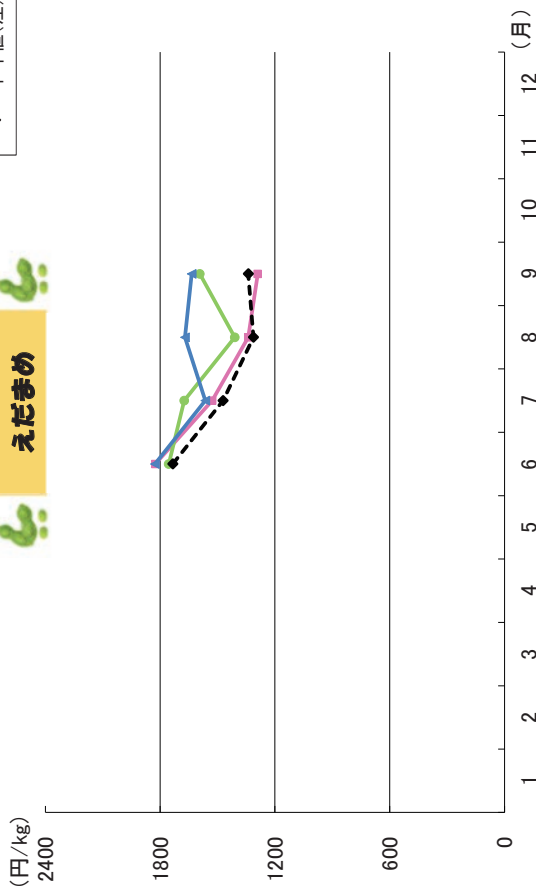
### 3. その他



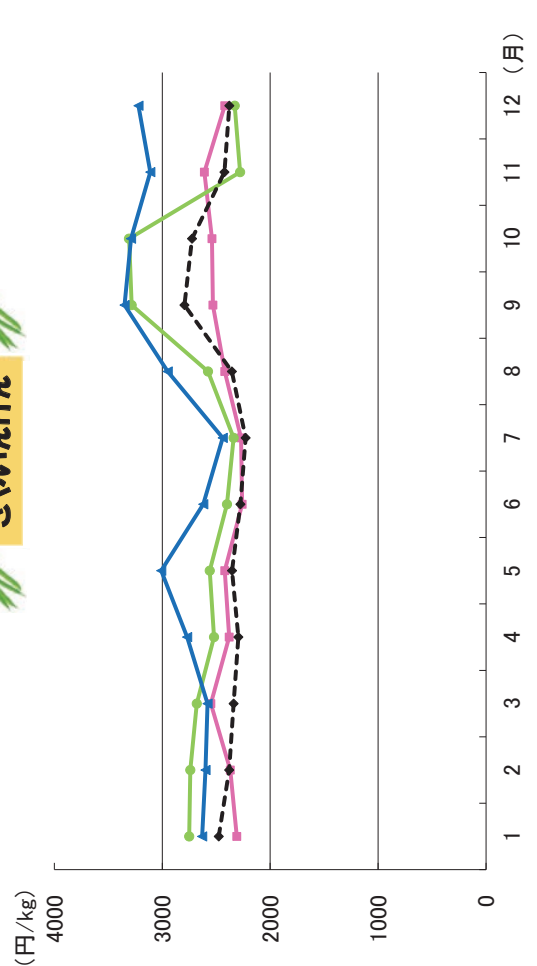
なかいも



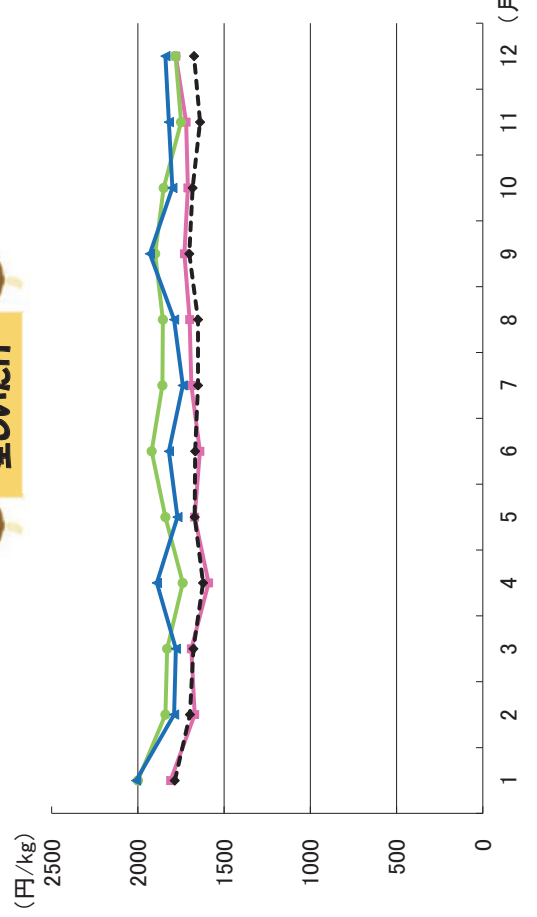
えだまめ



さやいんげん



生しいたけ



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」、(原資料：総務省統計局「小売物価統計調査」)